

2002（平成14）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 自己の死は、決して体験したことがなく、生きている現在においては論理的に知りえない完璧な未知であるということ。

* 「つねに・未来形でしかありえない」 = 「論理的に～完璧な未知である」。

二 第三人称の死は、珍しくない既知の消滅、消失にすぎないので、未知である自己の死を知るうえで何の役にも立たないから。

* 「なぜ「陳腐」なのか」という問いは、「第三人称の死は、陳腐だ」という判断の論拠を問うているので、必然的に解答の主題は「第三人称の死は」となる。

三 自己の死の徹底的孤絶への恐怖は、かえって自己の生が孤絶せず、人間としての関係性のなかにあった明証となるということ。

* 解答の骨子は、「孤絶死に対する恐怖は、逆説的に、人の生が孤絶していない（＝人間である）ことの明証である」という点にある。それが「消極的 negative」、すなわち否定形による明証ということである。（「消極的／積極的」の説明は、誰であれ困難であろう）

四 知性的に理解された表層的な人間の孤絶性は誤りであり、人は人と人との間の関係性のなかで生きているということ。

* 「自らの身体的支配」「他者の模倣」などは見当ちがいの解答である。鉄棒の例も楽器や車の例も、「孤絶していない」ことの例証であり、「私」「われわれ」とは、それぞれ「人」「人と人（との間）＝「人間」を意味する。なお、「第一人称と第二人称へと分極化する以前の、前個我的状況の変型である主体の集合体の一部として、自己が成立していたということ。」という解答を考えることはできるが、この問題文の範囲では「第二人称」にはほとんど踏み込めないので推奨しない。

五 人が人と人との間の関係性のなかで生きるという観点では、生にある限り、知性において理解された表層的な人間の孤絶性は抽象的構成に近い誤りとなる。それゆえ、第一人称の迎えようとする死のみが、その恐怖によって自己と他者の隔絶を切実に自覚させるから。（一二〇字）

* 人間の生は、「人間（人と人との間）」としての生であり、孤絶などしていない。とすれば、「知性において・抽象的に構成」された孤絶ではなく、真の孤絶を（肌膚に烙印のごとく）「自覚」させうるものは、「恐怖」を伴う、自己が迎えんとする死のみであろう。

* 「第二人称が介在」する「積極的な意味」は問題文の範囲内では問いきれない……。

六 a 空疎 b 錯覚 c 模倣（摸倣） d 抱擁